

日本の古文獻から見た中國初期禪宗

— 大安寺道璿の『集註梵網經』を中心に —

伊 吹 敦

はじめに

筆者は、從來から中國初期禪宗史を解明する上で日本の古文獻が果たす重要な役割に注目して、日本の種々の著作の中に引用の形で保存された佚文に基づいて、撰者未詳の『付法簡子』や『西國佛祖代代相承傳法紀』、菩提達摩撰『楞伽經疏』、金剛藏菩薩註『觀世音讚』、『金剛般若經註』等について研究を重ねてきた。^①今回取り上げる大安寺道璿（七〇二―七六〇、七三六年渡來）撰の佚書、『集註梵網經』三卷も全く同様の意義を有するものである。

著者、道璿は洛陽の大福先寺の住僧で、入唐した普照・榮叡によつて鑑眞（六三八―七六三）に先立つて戒律を傳えるために日本に招かれ、渡來後は、「律師」として活躍した。しかし、彼は、もともと北宗禪の大家、普寂（六五一―七三九）の弟子であつて、七五三年に鑑眞が渡來し、傳戒師としての職務を他に譲りうる状況が生じると、禪師としての本懐を遂げるべく奈良の比蘇山寺に籠もつて習禪に専念した。^②彼が『集註梵網經』を著したのは、この時期のことであり、北宗の禪師としての彼の思想を傳えるものといえる。

本書が特に注目されるのは、『梵網經』の註釋書だという點である。既に論じたように、當初、禪宗では、戒律（小乘戒）を全く顧みず、菩薩戒（大乘戒）のみを重視していたが、普寂の時代になると、他宗の批判を抑えるために小乘戒をも重視するように方針の轉換を行った³。その意味で、律師として活動しつつ菩薩戒の註釋を書いた道璿の存在は、普寂の立場を體現するものと言え、その著作、『集註梵網經』は、普寂門下の戒律思想を窺う上で、極めて重要な資料となりうるのである。

残念なことに、『集註梵網經』は既に散逸しているが、最澄（七六七—八二二）撰の『内證佛法相承血脈譜』（以下、『血脈譜』と略稱）や『顯戒論』、光定（七七九—八五八）撰『傳述一心戒文』、凝然（一二四〇—一三二一）撰『梵網戒本疏日珠鈔』（以下、『日珠鈔』と略稱）、定泉（一二七三—？）撰『梵網經古迹記補忘抄』（以下、『補忘抄』と略稱）、照遠（一二三〇—四一？）撰『梵網經下卷古迹記述迹抄』（以下、『述迹抄』と略稱）等にかんりの數の佚文が見られ、それらによつて道璿の菩薩戒思想の概要を窺うことも不可能ではない⁴。そこで、本論文では、『集註梵網經』の佚文や關聯文獻を取り上げつつ、道璿の戒律思想の特色を明らかにするとともに、それを敦煌文書等の北宗文獻と比較することで、それが北宗の思想と共通する思想基盤に立つものであることを明らかにし、中國禪宗史を研究する資料としての『集註梵網經』の價值を明確にしてゆくことにしたい。

一 『集註梵網經』に見る道璿の思想

1. 小乘戒と菩薩戒の關係

先ず注目すべきは、彼が小乘戒と菩薩戒をどのように考えていたかという點である。それを窺わせるのが、彼の

孫弟子に當たる最澄が『内證佛法相承血脉譜』において引用する吉備眞備撰『道瑢和上傳纂』の次の文章である。

正四位下太宰府大貳吉備朝臣眞備纂云。大唐道瑢和上。天平八歲。至自大唐。^a戒行絶倫。教誘不忘。至天

平勝寶三歲。聖朝請爲律師。俄而以疾退居比蘇山寺。^b常自言曰。遠尋聖人所以成聖者。必由持戒以次漸登。

和上每誦梵網之文。其謹誦之聲。零零可聽。如玉如金。發人善心。吟味幽味。律藏細密。禪法玄深。遂集註

菩薩戒經三卷。非我輩之所逮。更何得以稱述。^c

この『道瑢和上傳纂』の文章で先ず注意すべきは、小乗戒と大乘戒を一應區別しつつも、兩者を連續するものとして扱っているということである。即ち、

a. 戒行絶倫。教誘不忘。至天平勝寶三歲。聖朝請爲律師。

b. 常自言曰。遠尋聖人所以成聖者。必由持戒以次漸登。

という部分は、明らかに小乗戒を念頭に置いたものであるが、一方で、

c. 和上每誦梵網之文。其謹誦之聲。零零可聽。如玉如金。發人善心。吟味幽味。律藏細密。禪法玄深。遂集註菩薩戒經三卷。非我輩之所逮。更何得以稱述。

というのは、大乘戒經たる『梵網經』を重視したことを伝えるもので、道瑢が兩者を全く同等に扱っていたことを窺わせる（特に、『梵網經』を「律藏」と呼んでいることは注意すべきである）。

このように彼は菩薩戒と小乗戒を連続したものととして捉えていたようであるが、その理論的根據がどこにあったのかを窺わせるのが、最澄の『顯戒論』に引かれる次の『集註梵網經』の佚文である（この文章は、隨文釋に入る前の總論の部分からの引用と見られる）。

南唐註經云。問。大乘戒菩薩所學。聲聞戒律儀。亦得是菩薩所學不。答。今以四義料簡。初大小相隔者。如

此經。起一念二乘心。學二乘經律。即犯輕垢罪。法華。貪著小乘。三藏學者。不與共住。二以大斥小者。維摩經云。心淨故衆生淨。心垢故衆生垢。不出於如。又迦葉被呵云。我從是來。不復勸人以聲聞辟支佛行。三調伏攝受小乘者。一切登地以上菩薩。現作二乘。同二乘法。而調伏之。縱是三十賢菩薩。若出家者。一一皆受行二乘戒法。及欲攝受。不與二乘而相違背。四開小入大者。如法華云。汝等所行。是菩薩道。漸漸修學。悉當成佛。又大經云。菩薩摩訶薩。持四重禁。及突吉羅。敬重堅固。等無差別。已上註文。⁶

ここでは大乘の菩薩が大乗戒だけでなく小乗戒も學ぶべきかどうかについて四つの立場が示されているが、この四つは後になるほど次第に高度な立場であると見做されるから、石田瑞麿氏の言われるように、道瑠の立場は、當然、第四の「開小入大」にあつたと見ねばならないであろう。7つまり、究極の立場は菩薩戒に置かれるべきであるが、小乗戒もそのまま菩薩戒の一部として全く同等の價値をもつというのである。律師として活動しつつ、『集註梵網經』を著わした道瑠の基本的立場は、正しくここにあつたと考えることができる。

2. 菩薩戒の「宗」と「本源」

次に問題とすべきは、道瑠が菩薩戒そのものをどのように捉えていたかという點であるが、これに關して先ず擧げるべきは、『日珠鈔』卷第二に見える次の佚文である（これも、隨文釋に先立つ總論部分からのものである）。

第六所詮宗趣。疏。菩薩三聚淨戒爲宗者。辨今經宗。諸師異說。略舉八家以顯同異。一今疏法銑道瑠法進竝以三聚淨戒爲宗。8

これによつて、道瑠が、法藏（六四三七一—二）、法銑（生歿年未詳）、法進（七〇九—七七八）らと同様、『梵網經』に説く菩薩戒の本質を、「攝律儀戒」「攝善法戒」「攝衆生戒」の「三聚淨戒」に求めていたことが分かる。

では、その「三聚淨戒」は、何を據り所とするものなのであろうか。『梵網經』には、「十重四十八輕戒」を説き終った後の、いわゆる「流通分」の部分に、

千百億世界蓮花藏世界。微塵世界。一切佛心藏地藏戒藏無量行願藏。因果佛性常住藏。如如一切佛說無量一切法藏竟。⁹

という經文があるが、『述述抄』卷五下に據れば、この經文の「常住」「如如」に對する道璿の註釋は次のようなものであった。

道璿注云。前明一切衆生皆有佛性爲戒本源。其體不易名爲常住。其理無差故曰如如。謂一切色心皆入佛性戒中。無不如也。¹⁰

即ち、一切衆生の有する「佛性」を戒の「本源」とし、その「體」と「理」が「不易」で「無差」であるから、「常住」であり「如如」だとし、「一切色心」、つまり萬有が全て「仏性戒」そのものだから、「如」でないものはないと説いている。

『述述抄』によれば、この文章は法銑註をそのまま轉用したものとごくであるが、道璿が菩薩戒の根據を「佛性」、あるいは「眞如」（＝「如如」）そのものに求めていたことは間違いないであろう。

3. 「虚空不動の三學」としての菩薩戒

菩薩戒の根據を「佛性」「眞如」に求める道璿は、更に進んで、菩薩戒を「虚空不動」の三學の一つと見做す。それを示すのが、『傳述一心戒文』に引かれる、次の『集註梵網經』の佚文である。

今案道璿和上註梵網文。彼梵網經說。我已百劫修行是心地。號吾爲盧遮那。彼注文云。修行者。天台師說。

修行一切之法。不生不滅。不常不斷。不一不異。不來不去。常住一相。猶如虛空。言語道斷。自性清淨。是名修行。如是行人。於自性清淨心中。不犯一切戒。是即虛空不動戒。又於自性清淨心中。安住不動。如須彌山。是則虛空不動定。又於自性清淨心中。通達一切法。無癡自在。即是虛空不動慧。如是等戒定慧。名盧遮那佛。亦知。如天平勝寶年中。共鑑眞和上來。法進僧都註梵網經文。亦同璿和上戒文。亦同國清百録文。智者普禮自性三學。¹²

これは『梵網經』の經文「我已百劫修行是心地。號吾爲盧舍那¹³」に對する註釋であるが、從來から、道璿の思想を窺いうる重要な佚文として注目されてきたものである。ここで道璿は、天台智顛の説を引いて、一切法の「八不」を修し、「虛空」のごとき「常住一相」、「言語道斷」の「自性清淨」に達することが「修行」であるとし、このよ¹⁴うな人は自ずと戒定慧の三學を具することになるとい¹⁵う。そして、その「虛空不動の三學」こそが「盧遮那佛」であると説いている。

「天台師説」の出據は不明であるが、光定のいうように、『國清百録』に「虛空不動の三學」への言及が見られることは確かであるから、何らかの古い傳承に基づくものであろう。ただ、光定が「この註釋が法進と同じだ」と言っているところを見ると、恐らくは、道璿自身の所傳ではなく、誰かの註釋の孫引きと見做すべきであろう。

これと通ずる説は、他にも見ることができる。即ち、『述述抄』卷一下に引かれる『集註梵網經』の佚文において、道璿は次のように述べているのである。

道璿云。十無盡戒品者。兩釋。一如十重戒相。如初不殺生戒相。菩薩發心。盡十方虛空界心。生種類有形有命。普皆不殺。如是說者。名戒相無盡也。二者。戒體無盡者。如菩薩受不殺生戒時。盡虛空遍法界一切衆生類一衆生身上發得不殺清淨戒體。與菩薩一念俱¹⁶文。

これは、經文「吾今當爲此大衆重說十無盡藏戒品。是一切衆生戒本源自性清淨」の「十無盡藏戒品」に對する註釋であるが、「十重戒」が「十無盡戒」と呼ばれる理由を、「相無盡」と「體無盡」の二つに分けて説明している。そして、「不殺生」を例にすれば、菩薩が「盡十方虛空界」の全ての衆生を殺さないことが「相無盡」、菩薩が不殺生戒を受けるとき、同時に「盡虛空遍法界」の全ての衆生が不殺生の清淨の戒體を身上に發得することが「體無盡」であると説いている。

これも或いは誰かの註釋に基づいたものかと思われるが、いずれにせよ、菩薩戒を「虚空」に擬え、受戒によって世界そのものが清淨となると説く點に、「虚空不動の三學」と共通する點を認めることができる。

4. 禪定と『梵網經』

「虚空不動の三學」は、戒・定・慧を一體と捉えんとするものであるが、「八不」「空」「自性清淨」に達するための方は禪定を措いて外にない。従つて、道璿の菩薩戒思想において、禪定が極めて重要な役割を果たしていたことは想像に難くないが、それを窺わせるものとして、「四十八輕戒」の第四十一、「無德詐師戒」の經文に、

若不解大乘經律若輕若重是非之相。不解第一義諦。習種性長養性不可壞性道種性正性。其中多少觀行出入十禪支一切行法。不得此法中意。而菩薩爲利養故。爲名聞故。惡求多求貪利弟子。而詐現解一切經律。爲供養故。是自欺詐亦欺詐他人故。與人受戒者。犯輕垢罪。¹⁸

とある「十禪支」の解釋を擧げることができる。

經文では、「十禪支」は「師」として不可缺の要素とされているが、通常は、原始佛教以來の「尋(覺)」「伺(觀)」「喜」「樂」「定(心一境性)」「内等淨」「捨」「念」「正知」「捨受(不苦不樂受)」の十を指すと解されている。¹⁹とこ

ろが道塔は、『補忘抄』卷十所引の『集註梵網經』の佚文で、次のように述べているのである。

道塔注云。出入十禪支者。華嚴十定品亦說十種大三昧。名諸佛菩薩禪定。文²⁰

ここにいう「十種大三昧」とは、『華嚴經』（八十卷本）「十定品」の次の文を指すに相違ない。

爾時如來告普賢菩薩言。普賢。汝應爲普眼及此會中諸菩薩衆說十三昧。令得善入成滿普賢所有行願。諸菩薩摩訶薩說此十三昧故。令過去菩薩已得出離。現在菩薩今得出離。未來菩薩當得出離。何者爲十。一者普光大三昧。二者妙光大三昧。三者次第遍往諸佛國土大三昧。四者清淨深心行大三昧。五者知過去莊嚴藏大三昧。六者智光明藏大三昧。七者了知一切世界佛莊嚴大三昧。八者衆生差別身大三昧。九者法界自在大三昧。十者無礙輪大三昧。此十三昧。諸大菩薩乃能善入。去來現在一切諸佛。已說當說現說。若諸菩薩。愛樂尊重。修習不懈。則得成就。如是之人。則名爲佛。則名如來。亦則名爲得十力人。亦名導師。亦名大導師。亦名一切智。亦名一切見。亦名住無礙。亦名達諸境。亦名一切法自在。文²¹

ここでは、「普光大三昧」「妙光大三昧」等の「十三昧」の名前を掲げ、これは過現未の如來の所説であり、菩薩がこれを成就できれば、「佛」「如來」だと説いている。『梵網經』の「十禪支」に『華嚴經』の「十三昧」を當てるのは、恐らく、道塔の獨創であり、我々は、ここから、彼が「禪定」に對して竝々ならぬ關心を抱いていたこと、『梵網經』の禪定を他の人以上に大乘的に理解しようとしていたこと等を窺うことができる。禪宗の成立によって、インド以來の禪定觀に大きな變化が生じたことが、その根底にあったものと考えられる。

特に注目すべきは、この「十三昧」の中に、「清淨深心行大三昧」「智光明藏大三昧」「法界自在大三昧」「無礙輪大三昧」等のように、「虚空不動」の三學に通ずる三昧が説かれているということであり、道塔がこの經文によって『梵網經』の「十禪支」を解そうとした意圖の所在を窺うことができる。

5. 菩薩戒の絶對化

菩薩戒を上のように解する道璿は、その絶對的な價值を強調しようと努めた。それを窺わせるのが、上に引いた經文、「吾今當爲此大衆重說十無盡藏戒品。是一切衆生戒本源自性清淨」に續く次の偈文に對する註釋である。

我今盧舍那	方坐蓮花臺	周匝千花上	復現千釋迦
一花百億國	一國一釋迦	各坐菩提樹	一時成佛道
如是千百億	盧舍那本身	千百億釋迦	各接微塵衆
俱來至我所	聽我誦佛戒	甘露門則開	是時千百億
還至本道場	各坐菩提樹	誦我本師戒	十重四十八
戒如明日月	亦如瓔珞珠	微塵菩薩衆	由是成正覺
是盧舍那誦	我亦如是誦	汝新學菩薩	頂戴受持戒
受持是戒已	轉授諸衆生	諦聽我正誦	佛法中戒藏
波羅提木叉	大衆心諦信	汝是當成佛	我是已成佛
常作如是信	戒品已具足	一切有心者	皆應攝佛戒
衆生受佛戒	即入諸佛位	位同大覺已	眞是諸佛子
大衆皆恭敬	至心聽我誦		

『日珠鈔』卷第四では、この偈文の冒頭の「我今盧舍那。方坐蓮花臺」に關して、日本人の惠岳（生歿年未詳²³）の、彼師又云。問。我今盧舍那。此言何佛說。答。是法身說。然有三義。一由法身理聖解得生。以生解故名爲說

法。二法身理内具恆沙性德故。應化兩身得說戒等法門。故云說法。三法身之外無彼二身。是故二身說法即是法身之說。故得云法身說法也已上²⁴。

という説を掲げた後、道璿が、これと全く同じ考えであったとして、次のように述べている。

道璿律師全同惠岳。故彼註中引惠岳師臺上即法身義已云。雖復隨機異現之義。不無約本而言。故云法身說也。會意之從必莫如言異計。依見起報者大患也已上。此乃釋成惠岳師義以爲自義。此外無有別陳自義25。

そして、『日珠鈔』卷第六、『述迹抄』卷二上に據ると、續く「周匝千花上 復現千釋迦 一花百億國 一國一釋迦」に關して、道璿は次のように註している。

故璿師云。臺周有千葉花各現一佛。故云。千釋迦。即是十方淨土。臺藏内千土舍那。瀧通在千土上已上。『日珠鈔』²⁶

是以道璿云。一華是淨土。百億是穢土。淨穢同處文。〔述迹抄〕²⁷

これらによつて、道璿が盧舍那佛の蓮花臺を取り圍む千の花に現じた釋迦を「淨土」、その花に藏された百億の國を「穢土」としつつも、その相即を説いていたことが知られる。

また、『日珠鈔』卷第六は、この偈中の「是盧舍那誦 我亦如是誦」という句について、『集註梵網經』の佚文を引きつづ、次のように論じている。

經。是盧舍那誦。太賢師以自此已下爲釋迦說。問。此中誦者。爲指前頌。總指戒耶。答。總指心地戒本爲言。故璿云。舍那誦者。即指心地戒。是本盧舍那所誦。〔日珠鈔〕²⁸

つまり、道璿は、この偈だけでなく、『梵網經』に説かれる菩薩戒そのものが盧舍那佛の誦出したものだと理解したのである。

これらの佚文によると、道璿は、惠岳の説を受けて、この偈文、並びに『梵網經』そのものを法身である盧舍那佛の説と見做していたことが知られる。⁽²⁹⁾『日珠鈔』の當該部の説明に據れば、盧舍那を「報身」、或いは「自受用身」などとする説が多かつたようであるから、これは道璿の特徴の一つといえ、菩薩戒の價値を強調し、それを眞如と等置せんとする意圖があつたものと考えることが出来る。

更に、『梵網經』では、この偈文の後、

爾時。釋迦牟尼佛。初坐菩提樹下。成無上覺。初結菩薩波羅提木叉。孝順父母師僧三寶孝順至道之法。⁽³⁰⁾

という文章が續くが、この「初坐」「初結」について、『日珠鈔』卷第七は、次のような『集註梵網經』の佚文を引く。

璿云。言初者。以成佛竟。未往餘處。未說餘經。此經在初於樹下說。此舉誦戒之時。非是成道之時。准上偈中。成佛已後方接塵衆詣報佛所聽戒。後還道場方誦本戒。故言初坐菩提樹^{已上}。與註師釋全同。⁽³¹⁾

璿云。言初結者。正覺道成體絕三世。無初中後。無結無不結。爲應⁽³²⁾得受者。於寂滅道場。一時頓結無盡藏戒。不同聲聞隨犯漸制。以初誦名爲初結。非是初制名爲初結也^{已上}。此亦同銑師釋。

前者は、『梵網經』が他の經典に先立つ釋迦の最初の説法であつたこと(ただし、上の議論に従えば、この文章の「報佛」は「法身佛」でなければならぬはずである)、後者は、「正覺」、更にその體現である菩薩戒が「三世」や「結不結」を超越したものであることを強調するものである。いずれも法銑の説に基づくが、これも道璿の基本的立場が『梵網經』や菩薩戒の絶對性の強調にあつたことを窺わせるものと言えよう。

6. 俗人への配慮

上記の外で、道璿の菩薩戒思想で注目されるのは、俗人に對する強い配慮が窺えるという點である。彼が菩薩戒

を出家・在家に共通するものと見ていたことは既に述べた通りであるが、在家の人々にとって、「十重四十八輕戒」の全てを持することは必ずしも容易ではなかったであろう。そこで彼は、『述述抄』卷一上に引く次の文章に見るように、在家に關しては分受を認めるといふ立場を採った。

是以道璿注梵網唐僧。來住大安寺。彼疏與書云。於現光寺撰之云云。立二種門。一圓軌門出家謹護全受者也。二布行門在家隨分受二戒者。是則出家必可全受見。³³

即ち、道璿は、受戒の方法を、出家を対象とする「圓軌門」、在家を対象とする「布行門」の二つに分け、前者では全ての戒律を受ける必要があるが、後者では、能力に従って可能な数だけ受ければよいとしたのである。

更に、『述述抄』卷五下には、道璿が、戒律を受ける前であれば、七逆を含むいかなる悪事も受戒の妨げにならないと説いたとする次のような文章が存在する。

問。此七逆者。已受戒人所犯爲障歟。又未受戒所犯爲障耶。答。解釋雖不分明。淮經文又例比丘戒十三難中五逆等之難。未曾都受戒人有殺父母等者可成戒障也。但可除破僧殺和上闍梨三遮。於未受戒人無和上闍梨故。又俗人不可破僧故也云云。然道璿意不同此歟。彼道璿疏云。問。爲未受戒人作爲障。爲已受戒人所作爲障。答。雖未受菩薩戒。若有七戒等私云。七衆律儀戒。此人所作爲障。不論未受人文。

これは、あらゆる人が救われるべきだとする道璿の理想主義を示すものであるとともに、既に罪を犯してしまつた在家の人々が佛縁に近づけるよう配慮したものである。

これらの説は、菩薩戒の根據を「佛性」に置く道璿の立場を反映したものであるが、また、實際の布教活動において、その對象として在家の人々が重要な地位を占めていたことを暗示するものでもある。

二 道璿の菩薩戒思想の特徴とその由來

從來、道璿の『集註梵網經』の内容については、上に掲げた天台智顛の説を引く『傳述一心戒文』の文章、『三國佛法傳通緣起』卷下や『述迹抄』卷一上に、

道璿律師註梵網經。全依撲揚。弘之遐邇。(『三國佛法傳通緣起』)

大安寺唐僧道璿律師集注三卷全依智周疏也。然璿律師講敷律藏。弘北宗禪。傳華嚴宗。亦通天台宗。注梵網經即依台宗。(『述迹抄』)

と述べられていること、更に、俗慈弘氏らの研究によって、これらの記述の正しさが確認されたことなどから、一般に、天台教學によって『梵網經』の註釋を行った撲揚智周(六六八―七二三)の説に全面的に依據するものとされてきた。しかし、上に見たように必ずしもそうではなく、重要な部分で華嚴宗の法銑(七一八―七七八)⁽³⁸⁾や日本人の惠岳の註釋がしばしば用いられていることは注意すべきである。

しかし、これは、道璿が天台や華嚴の教學に造詣が深かったことを示すものではなく、⁽³⁹⁾ 閲覽することのできた註釋書の中で自身の思想に適う解釋を採用した結果、たまたまそうなったに過ぎないであろう。

例えば法銑は、

法藏(六四三―七二二)―慧苑(六七三―七四三?)―法銑

と師承する人で、道璿が渡來した時にはまだ二十歳にも満たなかったのであるから、彼自身がその註釋を日本に齎したとは考えられない。恐らくは、後に鑑眞が將來したものを借用して閲覽したのであろう。鑑眞一行が法銑の『菩

薩戒疏』を齎したことは、惠谷隆戒氏が、『唐大和上東征傳』に「靈溪釋子菩薩戒疏二卷」と記されているのがこれに他ならないことを明らかにしたことによって疑いえない⁽⁴⁾。道璿が法銑の『菩薩戒疏』を學んだのが日本に渡來して以後のことであったことは、道璿と華嚴宗との關係を考える上で、見落としてはならぬ點である。

智周の『梵網經疏』についても事情は同様である。智周はもともと、

基（六三二一六八二）—慧沼（六四八七一四）—智周

と師承する法相宗の人であるが、『唐大和上東征傳』には、「靈溪釋子菩薩戒疏二卷」と共に「智周師菩薩戒疏五卷⁽⁵⁾」の名が掲げられており、これを初めて日本に將來したのも鑑眞であったようである。もちろん智周は道璿より一世代前の人であるから、道璿が中國で既にこれを學んでいた可能性がないわけではないが、法銑の例を鑑みれば、日本で鑑眞將來のものを閲覽したと考えるのが自然であろう。つまり、道璿が智周の註釋をしばしば用いているとはいっても、そのことが法相宗や天台宗の立場に立っていたことを意味するわけではないのである。

このように見てくると、上に引いた『集註梵網經』の佚文の多くは、先學の著作を依用したものであるけれども、そこに道璿の思想的立場が十分に反映されていることは認めてよいはずである⁽⁶⁾。では、道璿の菩薩戒思想の特徴はどこに求めることができるであろうか。

先ず、上に論じた諸側面から道璿の菩薩戒思想の概要を示すと次のようになろう。

- a. 菩薩戒（大乘戒）と小乘戒を「開小入大」の方法で接合し、一體のものと捉えた。
- b. 菩薩戒の本質を「三聚淨戒」とするとともに、その根據を「佛性」に求めた。
- c. 菩薩戒を「虚空不動の三學」の一つと捉え、その相も體も「無盡」と考えた。
- d. 大乘の禪定によってこそ菩薩戒は受持できると考えた。

e. 菩薩戒を絶対化し、法身である盧舍那佛の所説と見做した。

f. 俗人に對しては、分受を認め、惡業も問わないなど、菩薩戒を受けやすいよう種々の配慮を行った。

これらを通覽すると、相互に密接な關係が窺われ、道璿の菩薩戒思想が大乗的立場を徹底したものであったことを知る事ができるが、では、この思想は、いったいどのようにして培われたのであろうか。

ここで注目すべきは、ここに見える思想の多くを、初期の禪宗文獻、とりわけ、道璿が學んだ「北宗禪」の文獻に見ることができるといふことである。例えば、最も代表的な北宗文獻である『大乘無生方便門』には、次のような文章がある。

菩薩戒是持心戒。以佛性爲戒性。心瞥起即違佛性。是破菩薩戒。護持心不起。即順佛性。是持菩薩戒^三。

次各令結跏趺坐。問。佛子。心湛然不動。是沒言淨。佛子。諸佛如來有人道大方便。一念淨心。頓超佛地。和擊木。一時念佛。

和言。一切相總不得取。所以金剛經云。凡所有相皆是虛妄。看心若淨。名淨心地。莫卷縮身心舒展身心。放曠遠看。平等看。盡虛空看。

和言。見何物。子云。一物不見。和。看淨細細看。即用淨心眼。無邊無涯際遠看。和言。無障礙看。和問。見何物。答。一物不見。和。向前遠看。向後遠看。四維上下一時平等看。盡虛空看。長用淨心眼看。莫間斷。亦不限多少看。使得者。然身心調。用無障礙。

和言。三六是何。子云。是佛。身心得離念。不見心心如。心得解脫。不見身身如。身解脫。如是長時無斷用入言。虛空無一物。清淨無有相。常令不間斷。從此永離障。眼根清淨。眼根離障。耳根清淨。耳根離障。如是乃至六根清淨。六根離障。一切無礙。是即解脫。不見六根相。清淨無有相。常不見斷。即是佛。^四

ここでは、「菩薩戒」が「持心戒」で、「佛性」を「性」とするもので「佛性」に順することが「持戒」であるとしたうえで、「結跏趺坐」し、「遠看」「平等看」「盡虚空看」等の修行を行うことで『金剛經』に説くような「相」を絶した「一物不見」の境地に至り、「用無障礙」となって「心」と「身」の「解脱」を得て「佛」となると説いている。

また、同じく北宗禪の代表的な文獻である『觀心論』にも、「盧舍那佛」を「清淨體」とし、そこからの「三聚淨戒」の流出を説く、次のような文章がある（この記述自體、『梵網經』の存在を前提とすると見るべきである）。

又問。所説。釋迦如來爲菩薩時。曾飲三斗六升乳糜。方成佛道。即如是先因食乳。後證佛果。豈唯觀心得解脱。

答曰。誠如所言。無虛妄也。必因食乳。然始成佛。言食乳者。乳有二種。佛所食者。非是世間不淨之乳。乃是眞如清淨法乳。三斗者。即是三聚淨戒。六升者。即是六波羅蜜。成道時。食如是法乳。方證佛果。若言如來食於世間姪慾和合不淨之牛羶腥乳者。豈不成謗悟之甚也。如來者。自是金剛不壞無漏法身。永離世間一切苦。豈須如是不淨之乳。以充飢渴。所説。牛不在高原。不在下濕。不食穀麥糟糖麩豆。不與特牛同群。身作紫磨金色。此牛者即盧舍那佛也。以大慈大悲憐愍故。於清淨體中出如是三聚淨戒六波羅蜜微妙法乳。養一切求解脫者。如是眞牛清淨之乳。非但如來飲之成佛道。一切衆生若食者。皆得阿耨多羅三藐三菩提也。⁵⁵

既に北宗文獻にこうした思想がある以上、道璿は、それを素直に承け繼いだと思ふべきであろう。つまり道璿は、北宗禪を日本に弘めるに当たって、東山法門以來、常に重視されてきた『梵網經』を註釋する形で自らの思想の表明を企てたのである。

ただ、『梵網經』には禪系の註釋書が存在しなかったため、實際に註釋を行うに当たっては、當時、日本に傳わっていた種々の註釋書の中から自らの立場に近い註釋を選び、それに私見を加える形で編輯するしかなかった。こう

して生まれたのが『集註梵網經』であつたと考えられるのである。

むすび

上に検討したように、『集註梵網經』の思想は、普寂門下の北宗禪のそれとよく呼応する。最澄の『内證佛法相承血脈譜』に引かれる『集註梵網經』の序文には、神秀や普寂への言及を見ることができ、

謹案註菩薩戒經序云。普寂禪師爲人所尊。一如大通。和上即入室弟子。骨氣倜儻。儒典盡包。雅志淵法。圓章窮底。終年竟歲。道俗滿寺。理戒嚴合。受法雲奔。日夜無間。誨誘忘疲。法化之盛。豈以言筆而能歎述之哉。⁴⁶

この序文の撰者は明らかでないが、最晩年の道璿と深い交流を持った人物の手になるものであることは間違いない。道璿が本書を撰述した意圖がそこに反映されている可能性は高い。そして、その序文に北宗の祖師への言及があるということは、とりもなおさず、彼が學んだ北宗禪の思想がこの註釋書に表現されているという意味に他ならないのである。

初期の禪宗史において菩薩戒が極めて重要な意味を持ったことは既に論じたところであるが、彼らの戒律思想を具體的に示す文献はほとんど残っていない。その意味で、道璿の『集註梵網經』が有する意義は極めて重い。そしてそれは、とりもなおさず、禪宗史を解明する上で日本の古文獻が果たしうる役割の大きさを示すものでもある。

注

(1) 次に掲げる拙稿を参照されたい。

伊吹 敦「北宗禪の新資料―金剛藏菩薩撰とされる『觀世音經讚』と『金剛般若經註』について」(『禪文化研究所紀要』一七、一九九一年)

伊吹 敦「最澄が傳えた初期禪宗文獻について」(『禪文化研究所紀要』二三、一九九七年)

伊吹 敦「菩提達摩の『楞伽經疏』について」(『東洋學論叢』二三・二四、一九九八・一九九九年)

伊吹 敦「金剛藏菩薩撰『金剛般若經註』校訂テキスト」(『東洋學研究』四〇、二〇〇三年)

伊吹 敦「初期の禪宗における經典註釋―『金剛藏菩薩註』に關する研究の整理」(福井文雅博士古稀記念論集『アジア文化の思想と儀禮』、春秋社、二〇〇五年)

(2) この比蘇山寺への入山については、従來から様々な説が行われている。即ち、道璿と鑑眞の間に軋轢があり、それが原因となったとする説(常盤大定『日本佛教の研究』春秋社、一九四三年、四五三頁)、比蘇山寺で行われていた山林修行者のグループ「自然智宗」に加わったとする説(蘭田香融『平安佛教の研究』法藏館、一九八一年、三二―三三頁)、病氣の養生と自己の研鑽のためであったとする説(前谷彰・恵紹「虚空藏求聞持法と自然智宗」高木神元博士古稀記念論集『佛教文化の諸相』山喜房佛書林、二〇〇〇年、二四四―二四八頁)、戒律によって佛教界を秩序化しようとした道璿と當時の民俗宗教的佛教信奉との齟齬が原因であったとする説(直林不退「道璿比蘇寺入山考」『佛教史研究』一六、一九八二年)等がそれである。これらに對して、筆者はこの行爲が道璿が學んだ北宗禪の傳統に基づくものであるという新たな説を提示した。この私見については拙稿「初期禪宗と日本佛教―大安寺道璿の活動とその影響」(『東洋學論叢』三八、二〇一三年)を参照されたい。

(3) 次の拙稿を参照。

伊吹 敦「戒律」から「清規」へ―北宗の禪律一致とその克服としての清規の誕生」（『日本佛教學會年報』七四、二〇〇八年度）

伊吹 敦「北宗禪における禪律一致思想の形成」（『東洋學研究』四七、二〇一〇年）

- (4) 佚文によって『集註梵網經』を復元しようとする試みは、既に百年近く前に裕慈弘氏によって行われているが、裕氏自身が述べているように、佚文収集において、なお十分ではない点があった。裕氏の成果については左記を参照。

裕 慈弘「大安寺道瑢の註梵網經について」（『寧樂』四一五、一九二五―一九二六年、根本誠二編『奈良時代の僧侶と社會』論集奈良佛教第三卷、雄山閣、一九九四年）

- (5) 『傳教大師全集』卷一、二二―二二二頁。

- (6) 『傳教大師全集』卷一、一三四頁。

- (7) 石田瑞磨『日本佛教における戒律の研究』（在家佛教協會、一九六三年）二〇二頁。

- (8) 大正藏六二、一五中。

- (9) 大正藏二四、一〇〇九下。

- (10) 『日本大藏經』二〇、大乘律章疏第三、三六二頁。『補遺抄』卷十所引もほぼ同文（『日本大藏經』一九、大乘律章疏第二、七三一頁）。

- (11) 『述述抄』では、この道瑢の註のすぐ後に次のような記述がある。

法銑云。如如者。前明一切衆生皆有佛性戒本源。眞體不易。名爲常住。其理無差。故曰如如。謂一切色心皆入佛性戒中無不如也文。（『日本大藏經』二〇、大乘律章疏第三、五八二頁）

- (12) 『傳教大師全集』卷一、六一―六八頁。また、同、六三―六三三頁にもほぼ同文の引用がある。

- (13) 大正藏二四、一〇〇三中。

- (14) 前掲『日本佛教の研究』四六一頁。前掲「大安寺道璿の註梵網經について」(根本誠二編『奈良時代の僧侶と社會』) 一四七頁。井上薫『奈良朝佛教史の研究』(吉川弘文館、一九六六年) 四九三頁。
- (15) 『國清百録』卷第一の「普禮法第三」に次のような文章がある。
 普禮十方三世諸佛虛空不動戒藏盧舍那佛。普禮十方三世諸佛虛空不動定藏盧舍那佛。普禮十方三世諸佛虛空不動慧藏盧舍那佛。(大正藏四六、七九五中)
- (16) 『日本大藏經』二〇、大乘律章疏第三、二七九頁。
- (17) 大正藏二四、一〇〇三下。
- (18) 大正藏二四、一〇〇八下―一〇〇九上。
- (19) 智顛撰『菩薩戒疏』卷下(大正藏四〇、五九九中)、法藏撰『梵網經菩薩戒本疏』卷第六(大正藏四〇、六五三上)、義寂撰『菩薩戒本疏』卷下之末(大正藏四〇、六八六中)等を參照。
- (20) 『日本大藏經』一九、大乘律章疏第二、七二三頁。
- (21) 大正藏一〇、二二二下。
- (22) 大正藏二四、一〇〇三下―四上。
- (23) 『日珠鈔』卷第一(大正藏六二、二三下)、『述迹抄』卷一上(『日本大藏經』二〇、大乘律章疏第三、二三二頁)等に
 よると、惠岳は日本人で『梵網經私記』一卷を著したという。
- (24) 大正藏六二、二三下。
- (25) 大正藏六二、二四上。
- (26) 大正藏六二、三二中。
- (27) 『日本大藏經』二〇、大乘律章疏第三、三〇二頁。
- (28) 大正藏六二、三七上。

- (29) 『補忘抄』にも「道瑿注引慧岳師義云。是法身説云云」と言及がある（『日本大藏經』一九、大乘律章疏第二、五八六頁）。
- (30) 大正藏二四、一〇〇四上。
- (31) 大正藏六二、三九上。ここには「詮師」とあるが、これは「詮」と「銑」の日本語の發音が同じく「セン」であることによる誤まりと考えられる。
- (32) 大正藏六二、四一中。
- (33) 『日本大藏經』二〇、大乘律章疏第三、二四五頁。『補忘抄』卷一にもほぼ同文がある（『日本大藏經』一九、大乘律章疏第二、五五二頁）。ただし、二門の名稱を「圓機門」「布行機門」とする。
- (34) 『日本大藏經』二〇、大乘律章疏第三、五六〇頁。ただし、原文は、「私云。七衆律儀戒」を本文としている。
- (35) 『大日本佛教全書』一〇一、一二四頁。
- (36) 『日本大藏經』二〇、大乘律章疏第三、二二二頁。
- (37) 前掲「大安寺道瑿の註梵網經について」を参照。
- (38) 法銑の『梵網經菩薩戒疏』は、もと四卷あったらしいが、現存するのは上卷のみで、「十重戒」の第四「故妄語戒」までに止まる。この他、善珠（七二三・七九七）の『梵網經略抄』（『日本大藏經』卷十八所收）などに多くの引用を見ることが出来る。
- (39) 道瑿を華嚴宗や天台宗の祖師と見做す従來の定説に根據がないことについては、以下の拙稿を参照されたい。
- 伊吹 敦「道瑿は本當に華嚴の祖師だったか」（『印度學佛教學研究』六〇―一、二〇一一年）
- 伊吹 敦「道瑿は天台教學に詳しくあったか？」（『印度學佛教學研究』六一―二、二〇一三年）
- (40) 惠谷隆戒「新出の唐法銑撰梵網經疏卷上之上に就いて」（『日華佛教研究會年報 第二年』一九三七年）を参照。
- (41) 師茂樹「撲陽智周傳についての二、三の問題―師承關係を中心に」（『印度學佛教學研究』四八―一、一九九九年）を参照。
- (42) 大正藏五一、九九三上。

- (43) 先に言及したように、註釋によつて佛身論に矛盾が認められるのは、場當りのに人の註釋を採用した結果と考えることができ。しかし、佚文から判斷する限り、そうした混亂は、全體としては必ずしも多くはなかつたようである。
- (44) 鈴木大拙『禪思想史研究 第三』（岩波書店、一九六八年）一六八―一六九頁。
- (45) 田中良昭『菩薩物持法』と『觀心論』（二）（駒澤大學佛教學部研究紀要）四四、一九八六年）五四―五五頁。
- (46) 『傳教大師全集』卷一、二二―二頁。
- (47) 注（3）に掲げた二篇の拙稿を参照。

【付記】 本論文は『世界漢學』二二號（北京、人民大學出版部、二〇一三年十二月）に掲載された中國語論文「日本古文獻所見中國早期禪宗―以大安寺道瑒所撰《集註梵網經》爲中心」の日本語版である。

【キーワード】 道瑒 集註梵網經 北宗禪 虚空不動の三學 菩薩戒